

## 平成26年度修了生 修士論文概要

**論文題目：**「放課後子ども教室」に通う児童の子ども教室享受感に関する研究  
—遊び支援プログラムの実践を通して—

**氏 名：**市川 麗  
**概 要**

本研究では、研究1として放課後子ども教室（以下、子ども教室）に通う児童を対象に、子ども教室享受感（以下、享受感）及びメンタルヘルス（怒り感情・疲労・引きこもり）の実態について明らかにすることを目的とした。子ども教室に通う小学1～6年生72名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、子ども教室を楽しんでいる児童ほど、怒り感情や身体の疲労が低いことが明らかとなった。また、怒り感情を抱えている児童ほど疲労感や引きこもりが強いことが示され、享受感はメンタルヘルスに影響を及ぼしている可能性があることが示唆された。研究2では、遊び支援プログラムの効果を検討することを目的として、子ども教室の小学1～2年生64名（分析対象者は14名）に遊び支援プログラムを3回行い、プログラム前後での享受感及びメンタルヘルスの変化を検討した。その結果、学年（1・2年）と介入（プレ・ポスト）の2要因の分散分析において、享受感は、2年生において介入前よりも介入後の方が得点が有意に高くなった。また、怒り感情、疲労、引きこもりは介入前よりも介入後の方が得点が有意に低くなった。性別（男子・女子）と介入（プレ・ポスト）の2要因の分散分析においては、怒り感情、疲労、引きこもりが介入前よりも介入後の方が得点が有意に低くなった。さらに、遊び支援プログラムに参加した回数群別による1要因の分散分析の結果、遊び支援プログラムに1回参加するよりも、3回すべてに参加した方が疲労感が有意に低くなった。以上のことから、遊び支援プログラムは享受感及びメンタルヘルスを向上させることが示唆された。

**論文題目：**不健全自己愛尺度の開発と健全自己愛、ソーシャルスキル、親の養育態度との関係

**氏 名：**今村 薫奈  
**概 要**

本研究では不健全自己愛尺度を開発し、開発した尺度を用いて健全な自己愛、ソーシャルスキル、親の養育態度との関連において検討することが目的であった。サンプル1（n=210）、サンプル2（n=120）の女子大学生は不健全自己愛尺度を開発するための質問項目、自己愛人格傾向尺度、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度、日本語版PBIに回答した。不健全自己愛尺度の開発においてはサンプル1で探索的因子分析を行い、サンプル2

における検証的因子分析により妥当性の検証を行った結果、「怒りの正当化」、「搾取的操作」、「誇大妄想」、「自己犠牲」、「価値の引き下げ」の5つの下位尺度、24項目の尺度が作成された。次に、ソーシャルスキルや養育態度の健全な自己愛と不健全な自己愛への影響について全対象者のデータをもとにモデルを比較検証した結果、不健全自己愛の形成には子供の適応能力を低下させる低養護、過保護といった養育態度が影響を及ぼしているが、健全な自己愛の形成には低養護の影響はなく、過保護と正の関係があることが示された。さらに、不健全な自己愛はソーシャルスキルの獲得に影響を及ぼさないが、健全な自己愛はソーシャルスキルの獲得を容易にすることが示された。このことから、たとえ過保護であっても子供への関心があり、受容的態度の親に育てられた子供は健全な自己愛を形成し、さらに高いソーシャルスキルを獲得して社会に適応できることが指摘された。

**論文題目：**メールコミュニケーション特性の影響および、共感的ならびにコンサルテーション的アプローチによるメールカウンセリングの異同に関する研究

**氏名：**加藤 美佳

## **概要**

本研究では、メールカウンセリングの効果に及ぼす影響を検討し、そのための方略を示唆することを目的とした。そこで3つの側面からの検討を行った。研究Ⅰでは、メールに対する基本的な態度を検討するために、メールコミュニケーションへの態度尺度を作成し、その信頼性、妥当性を検討した。研究Ⅱでは、共感的アプローチおよびコンサルテーション的アプローチによるメールカウンセリングの効果の異同を検討した。研究Ⅲでは、メールコミュニケーション特性がメールカウンセリングに及ぼす影響を検討した。これらの研究から以下の事が明らかとなった。

1. 7つの因子によるメールコミュニケーションへの態度尺度が作成された。それぞれの因子は「メールによるストレスの軽減」「メールによる自己開示可能性」「メールによる秘匿性」「メール送受信に伴う緊張」「未知の人とのメール交流」「メール使用上のデメリット」「メール使用における居場所感」である。この尺度の信頼性、妥当性も確認された。
2. キャリアカウンセリングの「初回時」には、少々のコンサルテーション的要素が内包されている方が効果的であることが明らかとなった。
3. 恋愛において、「メールによる自己開示可能性」「メールによる秘匿性」「メール使用上のデメリット」の特性が高い人、また「メール送受信に伴う緊張」の低い人は、受容・共感的なアプローチによって、被受容感や満足感へ正の影響を及ぼすことが明らかになった。

**論文題目：**がん患者遺族における告知から喪失体験後の心理過程の研究  
—レジリエンスの視点をふまえて—

**氏名：**齊藤 暁子

**概要**

本研究は以下の2点を目的とした。①がん患者遺族への連続性のある面接を通し、心理過程を見出すこと②時間軸の流れに沿い、心理過程をレジリエンスの視点をふまえて検討すること。関東圏内のがん患者会/遺族会A・Bのいずれかに所属する男女7名を対象として、5回程度(±2回程度)の連続性のある調査面接を実施した。

事例研究的な検討結果より、がん患者遺族の心理過程について以下の5段階が考察された。①告知時のショック②闘病生活における葛藤の生起③闘病中の心理面、身体面、行動面での変化④喪失体験後の心理面、身体面、行動面での変化⑤現在からの振り返りと気付き。心理過程の差異は、以下の2点が考えられる。①喪失体験後の過程の違い②闘病期間の長さとの関係。がん患者遺族の心理過程におけるレジリエンスの検討では、t検定の結果から面接開始直前に測定したレジリエンスと終了直後の全体値は、直前のレジリエンスが有意傾向にあった。連続性のある面接を通じたことで喪失体験の直面化が起これ直後のレジリエンスが下がったとも考えられる。下位尺度の1つである「肯定的な未来志向」では、t検定の結果より面接直前の方が有意に高かった。連続性のある面接を通して、“今”という現実には焦点化され、喪失体験と改めて直面化したことで「肯定的な未来志向」が下がったとも考えられる。副次的に、調査面接における臨床面接的意義も見出された。“面接”の場で生じる作用として“気付き”と“カタルシス”があるとされているが、本研究で見出された「現在からの振り返りと気付き」の段階が、遺族ケアにおける「自己への気づきを促進すること」に通じるものがあるとも推察された。

**論文題目：**女子大生における過敏性腸症候群(IBS)とその関連要因についての研究

**氏名：**相馬 理沙

**概要**

女子大生183名を対象に、IBS傾向、精神的健康度(GHQ28)およびストレスへの対処法(TAC-24)を測定する質問紙調査を実施し、IBS傾向に、精神的健康度、ストレスへの対処法が関与しているのかを検討した。

RomeⅢの基準により、IBS群は120名(65.5%)、非IBS群は63名(43.4%)に分類された。また、GHQ28の身体的症状得点のカットオフポイント以上群(身体的症状高群)が25名(13.7%)、カットオフポイント未満群(身体的症状低群)が158名(86.3%)であった。

身体的症状高群と低群、IBS群と非IBS群で構成された4群の内訳は、身体低IBSなし(症状なし群)が52名(28.4%)、身体低IBSあり(IBSのみ群)が106名(57.9%)、身体

高IBSなし（身体的症状のみ群）が11名（6.0%）、身体高IBSあり（IBS+身体的症状群）が14名（7.7%）であった。

分析の結果、IBSであることは精神的健康度に対する直接のストレス、あるいは直接の負の要因にはならないことが示唆された。しかし、IBS群、非IBS群、IBS下位分類の各群、身体的症状高群、身体的症状低群と、それぞれに関係のあるストレス対処法があることから、精神的健康度を変化させる可能性はあると考える。また、身体低IBSあり（IBSのみ群）と身体低IBSなし（症状なし群）の比較では、身体低IBSあり（IBSのみ群）にのみ有効なストレス対処法が見出されたことから、IBSでない人に比べてIBSである人は、ストレス対処法の影響があることが分かった。

**論文題目：**実存的アプローチによるデス・エデュケーションプログラムの作成と効果検証  
—人生の葛藤及び老いのテーマを中心に—

**氏名：**高橋 亜希

**概要**

実存とは、「個別者として自己の存在を自覚的に問いつつ存在する、人間の主体的なあり方」である（松村、2006）。本研究の目的は、「死」を考えることで、「生きること」を主体的に考えられるような実存的アプローチのデス・エデュケーションプログラムを作成することである。さらに、その効果について検証する。

本研究では、2種類のプログラムを作成した。プログラム1は「難病に侵された子どもをもった家族の葛藤」をテーマとしたものである。その結果、「時間イメージ尺度」の未来イメージ、時間イメージはポジティブな方へ変化した。さらに「LAP」の「人生の統御」因子が有意に高まる傾向を示した。「死生観尺度」の「死後の世界観」が現在イメージに正の影響を及ぼし、「解放としての死」、「寿命観」が過去イメージに負の影響を及ぼすことが明らかとなった。

また、プログラム2は万人に訪れる「老い」の擬似体験をテーマとしたものである。その結果、「時間イメージ尺度」の現在イメージがポジティブな方へ変化した。「死生観尺度」の「死への恐怖・不安」が「人生の意味と目的の探求」因子に、「死への恐怖・不安」、「人生における目的意識」、「寿命観」が過去イメージに正の影響を及ぼし、「死からの回避」が過去イメージに負の影響を及ぼすことが明らかとなった。以上より、本研究のデス・エデュケーションプログラムの有効性が明らかとなった。

論文題目：CMCにおける自己開示でブログ利用者はどのような心理的期待を持っているのか

氏名：多和 千里

### 概要

本研究の目的は、①ブログ利用者の心理的期待、②書き込み前後のモチベーションの変化、③“現実場面”と“CMC場面”の2つの場面のカテゴリにおける自己開示の特徴、④“現実場面”内と“CMC場面”内における各カテゴリごとの自己開示の特徴を明らかにすることであった。方法は、ブログを利用しており、3か月以上の放置がない10代～50代の男女73名を調査対象とし、Webアンケート調査を行った。

①ブログ利用者の心理的期待では、6項目の上位概念が抽出された。主に自己に向かう効用、他者交流の2つの視点に分けられた。

②利用者の多くが、書き込み後に「ポジティブ効果」を感じていることが明らかになった。特に「文章能力の向上」や「作業の向上」がより一層注目される。

③“CMC場面”において「学校・職場・育児」、「友人・同僚関係」の自己開示は現実場面よりも低かったが、これは「視覚的匿名性」の影響を受けやすい項目であったからと考える。

④“CMC場面”内における自己開示は、“現実場面”において自己開示したカテゴリおよび類似カテゴリに触発されやすいと考えられた。

論文題目：万引き行為の抑制プロセスに関する研究

氏名：寺川なな実

### 概要

万引き行為を経験したことのある者は、離脱までにどのような心理的プロセスを経ているのか、また、どのように抑制を維持しているのか。本研究は、雪だるま式サンプリングによって得られた、万引き行為経験があり、既にその行為から離脱して7年以上経過している成人男性4名を対象に、構造化面接および半構造化面接を行い、質的研究法（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ：M-GTA）を用いて探索的研究を実施した。その結果、万引き行為経験者は、行為のプロセスにおいて、大きく万引き行為『促進』と『抑制』の2つのプロセスをたどっており、『促進』のプロセスにおいては「万引きのモデリング」「満足感」「見つからない事実とその自信」「慣れ」「バレても大きな事にはならない」「親が甘い」、『抑制』のプロセスにおいては「周囲からの視線の認識」「リスクの認識」「自分・友人が捕まる体験」「他人への迷惑の認識」「必要性の減少」「罪悪感」といった心理的プロセスが見出された。この結果より、万引き行為をする少年への介入として『促進』プロセスを弱め、『抑制』プロセスを強める働きかけが有効であることが示唆された。今後の課題としては、男性だけでなく女性を対象とした研究をすること、さらに、

本研究によって明らかになった知見をもとに非行行為に関心を向けてしまう少年たち、また始めてしまった少年たちに対する、介入研究を行うことなどである。

**論文題目：**女子大学生における愛情の関係モデルと感情調節及び心の健康との関連

**氏名：**中澤 里香

### **概要**

本研究では、人間関係と感情調節の方略および精神的健康の関連を検討することを目的に、外部との接触が増える青年期である女子大学生279名を対象とし、愛情の関係スケール、感情調節尺度日本語版及び日本語版GHQ精神健康調査票28項目版を実施した。その結果、愛情の関係スケールの類型別ではGHQ得点に有意な差はみられなかった。感情調節の方略別では、「再評価方略」より「抑制方略」の場合に、GHQ要素スケールの「不安と不眠」や「社会的活動障害」、「うつ傾向」が高く、精神的健康度は低いことがわかった。感情調節の方略別（「抑制方略」「再評価方略」と愛情の関係スケールの類型別（「Lw型」「一人型」「二人以上型」）を組み合わせた6群を独立変数、各GHQ要素スケール得点および総合得点の平均値や中央値を従属変数とし、差の検定を行ったところ、「Lw型」では「抑制方略」の場合に精神的健康度が高く、「再評価方略」の場合に精神的健康度が低い結果になった。逆に愛情の要求を向ける対象がいる場合では、「再評価方略」で精神的健康度が高く、「抑制方略」で精神的健康度が低い結果となった。また同じ「抑制方略」でも、「不安と不眠」( $F(2, 80) = 6.31, p < .01$ )、「うつ傾向」( $p < .05$ )、全体の精神的健康 ( $F(2, 75) = 4.82, p < .05$ ) は、「Lw型」より「二人以上の型」の方が悪い結果となった。「Lw型」と「一人型」、「二人以上型」によって感情調節の方略による精神的健康度への影響が異なる結果となった。

**論文題目：**小学校の援助体制及び共同体感覚が教師のメンタルヘルスに及ぼす影響

**氏名：**長谷川 恵

### **概要**

近年、社会状況や子どもの変容を背景として、学校における今日的課題は複雑化・多様化しており、教師自身がメンタルヘルスに問題を抱えているという極めて深刻な現状と言える。そこで本研究は、教師のメンタルヘルスを向上させる要因を明らかにすることを目的とした。先行研究から、学校のチーム援助が教師のメンタルヘルスを向上させる要因となることが明らかになっている（山口・山本・渡利・井上、2014）。また、共同体感覚は社会適応やメンタルヘルスとの関連が指摘されている（高坂、2011）。そこで、小学校教師のメンタルヘルスの向上に関連する要因としてチーム援助体制及び共同体感覚を取り上げた。予備調査では、小学校教師50名を対象に質問紙調査を実施し、28項目の共同体感覚

に関する質問紙を作成した。本調査では、小学校教師212名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、全26項目の小学校教師版共同体感覚尺度が作成された。また、「チーム援助体制」及び「小学校教師の共同体感覚」が「バーンアウト」に与える影響について共分散構造分析により、検討した。その結果、チーム援助体制を整備することは、教師同士の信頼関係を築くこと（所属感・信頼感）、主体的に人に貢献していると感じること（貢献感）、自己を肯定的に受け止めること（自己受容）につながり、教師のメンタルヘルスを向上させることが明らかになった。

#### 論文題目：育児バーンアウト予防プログラムの開発

—母親の養育スキルおよび子どもの社会的スキル向上のための認知行動的介入の効果の検討—

氏 名：マーシャル理恵子

#### 概 要

本研究の目的は、育児バーンアウトの予防プログラムを開発し、その効果を検討することであった。効果の検討には介入群（N=29）と統制群（N=25）による対照比較を行った。

本研究では、育児ストレスを、子どもの不適応行動などを母親が脅威であると評価した場合の「子ども関連育児ストレス」と、その脅威に対して母親が対処不可能と評価した場合の「母親関連育児ストレス」の2段階に分けた。そして、それぞれの段階に対応する複数の認知行動技法を用いたパッケージ・プログラムを作成し介入を行った。「子ども関連育児ストレス」への対処としては、応用行動分析の概念と強化・消去の原理に基づいて、子どもの社会的スキルを向上できる養育スキルを母親が獲得できるようにするトレーニングを行った。さらに子どものSSTも併せて行った。また、「母親関連育児ストレス」への対処では、母親の精神的健康の問題に対する予防的アプローチとして、心理教育、リラクゼーション、問題解決法といった技法を用いて母親が適切なストレス・コーピングを行えるようにするトレーニングを行った。

その結果、介入群において、母親の養育スキルにおける一貫性が向上し、子どもの適応的行動を強化できるようになり、子どもの社会的スキルの向上、母親の不安の軽減ならびに育児バーンアウトの軽減が見られた。これらの結果から、同プログラムが育児バーンアウト予防プログラムとして機能することが示された。

論文題目：「心の支援者」の資質としての「寛容性」についての研究  
—心理的well-beingの視点から—

氏 名：矢嶋 文哉

概 要

【目的】「心の専門家」、「対人援助職者」、「宗教家」等「心の支援者」と呼ぶべき人への社会的要請が高まっている。本研究は、この「心の支援者」に求められる「心理的well-being」を通して、「寛容性」という資質に着目することにより、「心の支援者」の特性を検証していくことを目的とする。加えて、Big Five尺度の5因子特性、「寛容性」、さらに「心理的well-being」間の因果関係についてのモデル検討も行う。【方法】「心の支援者」群として臨床心理士、キリスト教聖職者の合計71名、また比較対象群として一般教会員139名に対して質問紙調査を実施した。質問紙は、フェイスシート、Big Five尺度、日本語版Heartland Forgiveness Scale、心理的well-being尺度による。【結果】①「心の支援者」は「寛容性」、「心理的well-being」がともに高く、また②「心の支援者」の「寛容性」は、「心理的well-being」に深く関係し、正の影響を及ぼしていた。また③「心の支援者」の「寛容性」は、気質や成育的資質に近い資質ではないかとの想定が可能となった。さらに④「寛容性」の高い「心の支援者」は、「調和性」が高く、「情緒不安定性」が低いとの傾向も示された。加えて⑤両群合わせて全体で共分散構造分析を行った結果、「心理的well-being」に対して、「外向性」、「開放性」、「調和性」、「自己状況寛容」が正の影響を与える関係が明らかとなった。【結論】「心の支援者」にとって「寛容性」は重要な資質であることが示された。

論文題目：養子縁組里親の心理に関する研究

—縁組への決意から親子関係構築に至るプロセスを中心として—

氏 名：山口 紀子

概 要

養子縁組を目的として子どもを養育する養子縁組里親は、養子を迎える決心をしてから、さまざまな過程を経て子どもを迎え、親子関係を構築していく。本研究では、先行研究がほとんどなかった養子縁組里親の特殊な心理状況を、縁組への決意から親子関係の構築までのプロセスに焦点を当て、明らかにした。40～50代の4名の養子縁組里親の女性に、養子縁組の決心をした理由、子どもの紹介や同居から縁組成立に至るまでの気持ちの変化についてインタビューを実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) により分析を行った。

分析の結果、11のカテゴリーと1つの大カテゴリーが生成された。養子縁組里親は、不妊治療による精神的傷つきを持ちながら不妊治療を諦め養子を迎える準備を経て、養子を迎える決心を固める。その後、養子を迎える前の最終意思決定の保留期間を将来がみえな

い不安の中で過ごす。実際に子どもとの同居が始まり、同居から数か月間育児に追われる日々を忙しく過ごすが、日本の家族法制度への不満を感じつつも、充実した子どものいる生活を実感できるようになる。子どもを育てる意味の問い直しや子どもへの願いに充実感を持つ一方で、仲間との出会いと経験者からの学びを求め、乳児委託の問題やより良い未来に向けた積極的視点を提起するなどの社会的関心が示された。